NPO 法人岡崎がくどうの会

第 57 回全国学童保育研究集会（20221029~20221030）レポート

【クラブ】（　　あおぞらクラブ　　）
【名　前】（　　筧　由衣　　）

① 2 日目に参加した分科会のタイトルをお書きください。

第（　18　）分科会　（　　子どもの気持ちに気づく　～家庭で、学童保育で～　　）
※全体会のみに参加の場合は、全体会の記念講演のタイトルをお書きください。

② この分科会を選んだ理由をお書きください。

“子どもの気持ちに気づく”とても当たり前で指導員として多分 1 番にできなければいけないことで、でも難しくて、自分がしっかり子どもの気持ちに気づけているのか不安なことばかりで、答えを求めたところで答えはどこにもないことはわかっていても、求めずにはいられない…、そんな日々の中で何か少しでも自分の引き出しが増えればなと思ったことが受講のきっかけです。

③2 日間の全体会と分科会で心にのこったことや気づいたことや学んだこと、今後の実践に活かしていきたいことなど、感想もふくめてお書きください（自由記述）。

最初は子どもの気持ちを考えるんだから、子どもの話を中心に講義が進んでいくんだろうなと思っていました。

“しかし”なのか“だからこそ”なのか、ちょっとよくわかりませんが…、講師の杉田真衣さんは、『指導員さん現場大変だよね』『私（杉田）がこんなところでこんなこと言わなくても、みんなすでにやってくれてるんだよね』『きっと、わかってもできないときもあるー！って感じだよね』と、どこか保護者や指導員に寄り添ってくださるあたたかさを感じる講義内容でした。

上記の気持ちを抱えて講義を聞き始めた私にとってどこかふわふわと不思議な感覚がありましたが、聞いていくうちに子どもや子どもの気持ちを真ん中に置くけれど、そのためにはまず大人（保護者や指導員）がそのときの自分の気持ちに気づくことが必要で、大人の心の余裕が必要だからこそ、1 つめに保護者が置かれている状況について考え、2 つめに学童保育所が置かれている状況について考え、3 つめに保護者と指導員という立場は関係なく“大人”について考え、最後に子どもたちの気持ちについて考えていくんだろうなと思いました。

講義の中で印象に残った内容の 1 つに、『大人がおおらかに語り合える場を』という話がありました。その話の中では、まず大人同士で自分たちが置かれている状況を共有し、お互いに苦労をねぎらっていくことが必要で、子どもたちの言っていることがわからなかったり、子どもの気持ちに気づけているのか自信がないといった疑問や不安を抱えすぎることなく、打ち明けあい、語り合う機会を設けることで、それはめぐりめぐって子どもたちへの声掛けにつながっていくというものがありました。

親だったらわかるはずとか、指導員なら気づくべきといった呪縛のようなものではなく、そういったしがらみが何もないような関係性（保護者とも同僚とも）を大人同士が築いていくことの大切さを教えられた気がします。ですが、この話を聞いて今現在自分の持っている“モノ”でどうしたらそのような関係や場所を作っていけるのか想像することができず、とても大きな壁が立ちはだかったように感じたのも事実です。

２つめに、『大人たちは常に子どもたちから見られていて、私たち大人のあり方や生き方が問われている』という話です。こちらの話は深堀をしていったわけではありませんが、とにかく自分自身の人生において体験したことや経験したこと、その経験や体験によって生まれた自分の考え方などが、のちに子どもたちに対する伝え方だったり、自分の子ども観というものにつながっていくのだろうなと感じました。

杉田さん自身の人生にからめた話や、大学で講師をしたり学生とかかわったりする中での経験談や失敗談を交えていただいたり、性差やマイノリティにからめたりと、テーマに沿いつつもいろんなお話を楽しく聞くことのできた全国研でした。

※提出されたレポートは、当会の広報誌やホームページに掲載する場合もありますので、あらかじめご了承ください。

※〆切は、11 月 13 日（日）です。常勤･専任指導員に手渡し、または FAX：0564-32-0325 までお送りください。